

日本語の空間表現「に」と「で」の 選択にみられる母語の影響 — 助詞選択テストの結果分析 —

蓮池いずみ

キーワード 空間表現、「に」と「で」、助詞選択テスト、言語転移、TLU分析

1. はじめに

日本語学習者にとって場所を示す格助詞「に」と「で」の使い分けは難しく、特に学習の初期段階においては「に」と「で」の混乱の中で一方の助詞を過剰に使用したり、特定の名詞や動詞の存在を手がかりに助詞を選択するなどの学習者独自の助詞選択ストラテジーが見られることなどがこれまでの研究によって報告されている。しかし、日本語の空間表現選択に母語の影響がどのように関わっているのかについて詳しく分析した先行研究はまだ少ない。本稿では、韓国語、中国語、英語を母語とする学習者グループの助詞選択傾向を調査し、日本語の場所を示す格助詞の習得過程に言語転移がどのように関わっているのかについて考察する。

2. 空間表現習得に関する先行研究

英語の空間指示表現の習得に関する代表的な論文であるJarvis & Odlin(2000)は、フィンランド話者とスウェーデン話者のEFL(外国語としての英語)学習者計210名の作文を分析し、両者の空間指示表現の使用にL1(母語)の影響による違い(例:フィンランド話者による前置詞の脱落やinの過剰使用など)が顕著に現れていることを報告している。英語の空間指示表現の習得過程において学習者のL1背景が重要な影響を及ぼしているという研究結果は、日本語の場所を示す格助詞習得研究においても学習者のL1の違いが大きく関わっている可能性を示唆するものであると考えられる。

日本語の場所を示す格助詞習得に関しては、久保田(1994)、岩崎(2001)など

の研究により、主に初級レベルの英語母語話者に場所を示す格助詞「に」と「で」の使い分けに混乱がみられ、その結果「に」を過剰使用する傾向があることが報告されている。また、迫田(2001)は、中級レベルの母語の異なる学習者に助詞の穴埋めテストを実施した結果、「位置を示す名詞+に」、「地名・建物を示す名詞+で」の「ユニット形成」の傾向が見られると報告し、これは母語の異なる学習者に共通する傾向であるとしている。一方、岩崎(2001)は初級から上級レベルのJFL(外国語としての日本語)学習者のインタビュー結果から、「に」=in, on, towards、「で」=at, with, byのように英訳に依存して区別をする学習者がいたと報告しており、日本語の空間表現の使用にL1転移がかかっている可能性を示唆している。しかし、これらの研究において母語転移の検証は十分になされていない。その原因として、母語の異なるグループ間を比較した研究が少ないということがある。また、主に英語母語話者の学習者はJFL、中国語、韓国語話者の学習者はJSL(第二言語としての日本語)であるため、両者を単純に比較することはできないという問題点もあった。Odlin(1989)が指摘するように、転移の有無を論ずるためには母語の異なる2グループ以上の言語運用を比較することが必要である。また、ある現象が転移であるか否かを判定するにあたっては、目標言語のある項目がL1に存在する学習者とそうでない学習者を比較する必要があるとされている(Odlin(2003))。

そこで、蓮池(2004)は、L1に日本語に類似した空間表現(後置詞)を持つ韓国語母語話者と、主に介詞(前置詞)によって空間表現を表す中国語母語話者(上級レベルと中級レベル)を対象に日本語の場所を示す助詞「に」、「で」、「を」の選択テストを行い、母語の影響の有無を検証した。その結果、「に」の過剰使用や特定の名詞とのユニット形成の傾向は韓国語話者にはみられず、中国語話者に顕著であった。さらに、蓮池(2007)では、韓国語母語話者と中国語母語話者に英語母語話者を加えたJSL学習者(初中級レベルと中上級レベル)および日本語母語話者に対し、絵を描写する筆記形式のタスクを実施し、学習者のL1データと比較することにより、本格的な母語転移の検証を行った。その結果、韓国語話者に母語からの直接的な転移とみられる「に」の多用が観察され、主題卓越言語である韓国語話者と中国語話者に「は」の多用傾向もみられるなど、L1背景と相関のある結果が得られた。これらの調査結果は、日本語の空間表現の選択にもL1転移が深く関わっている可能性を示すものであるといえる。

本研究では、蓮池(2007)と同じ被験者(JSL学習者)に対して行った助詞の穴埋め式選択テストの結果を分析し、「に」や「で」の選択におけるL1の影響を探る。

3. 調査方法

3.1. 対象

調査対象者は、日本の大学や日本語学校等の教育機関で日本語を学習する中国語母語話者¹、英語母語話者²、韓国語母語話者の計97名である。母語と日本語のレベルによって、以下の6つのグループに分けられる。学習者の日本語レベルは SPOT³の点数によって分けており、L（初中級）は概ね初級後半から中級レベル前半、H（中上級）は中級後半から上級前半レベルにあたる。分散分析で被験者のSPOT得点の母語間比較をした結果、3つの母語グループの日本語能力はほぼ同レベルであると考えことにする。また、日本語母語話者34名⁴に対してもSPOT以外の全てのテストを実施し、これを目標言語のベースラインデータとした。

HK：中上級レベルの韓国語母語話者(16名)

LK：初中級レベルの韓国語母語話者(16名)

HC：中上級レベルの中国語母語話者(16名)

LC：初中級レベルの中国語母語話者(16名)

HE：中上級レベルの英語母語話者(15名)

LE：初中級レベルの英語母語話者(18名)

3.2. 方法

調査では、学習背景アンケート調査後、SPOTを行い、続いて場所を示す格助詞に関する3つのタスクを行った。3つのタスクとは、1) 蓮池(2007)で使用した小作文のタスク、2) 助詞「に」、「で」、「を」、「と」の穴埋め式選択テスト、3) 誤用訂正を含む文法性判断テストである。3種類のテストを実施した理由は、1) の比較的自由な言語産出を可能にするタスクと、2) の産出がより制限されたタスク、3) の被験者のメタ言語知識を問うタスクの結果を比較し、タスクの種類にかかわらず、空間表現の使用に同じ傾向が観察されるか否かを検証するためである。本稿では2番目の助詞選択テストの結果について考察する。

3.3. テストの内容

助詞選択テストは、空間を示す格助詞「で」が正答の問題が10問、「に」が正答の問題が10問、「を」が正答の問題が10問、ダミーとして「と」が正答の問題

7問の計37問からなる。初級後半の学習者でも問題文が理解できるように、問題文の語彙や文法は日本語能力試験4級出題基準に沿ったもののみを使用した。また、隣接する名詞の影響を避けるため、助詞の直前の名詞は「位置」を示す名詞（「上」、「中」、「左」など）以外のものを使用した。さらに文型や動詞の活用の影響などを避けるために助詞に後続する述語の形式もできるだけ単純なものにした。

日本語母語話者の「に」、「で」、「を」の問題における平均正答数は、表1のとおりであった。分散分析で助詞間の比較をした結果、「を」の正答数が「に」及び「で」より有意に少なかった [$F(2, 66)=14.58, p<.01$] が、「に」と「で」間には有意差がなかった。本稿では、「を」が正答の問題10問は日本語母語話者の解答において揺れが大きいため分析の対象からはずし、日本語母語話者の正答数に差のない「に」が正答の問題と「で」が正答の問題、計20問のみを分析の対象とする。「に」と「で」の問題に使用された問題文と各グループの正答率については4.3章の表4を参照されたい。

表1 日本語母語話者の平均正答数 (n=34)

助詞	平均値	標準偏差
に	9.91	0.29
で	9.91	0.29
を	9.18	1.06

注：正答数は0から10の尺度。

3.4. 学習者のL1背景と、本研究のリサーチ・クエスチョン

今回の格助詞選択テストで扱う「に」と「で」に対応する表現に限っていえば、各言語では以下のように表現されている。まず、韓国語には日本語の「に」と「で」にほぼ対応する助詞 [e] (에) と [eso] (에서) がある (朴(1997), 金(2004))。一方、中国語では、場所を示す表現は多くの場合「介詞(前置詞)」で表され、日本語の場所を示す格助詞「に」、「で」、「を」に対応する介詞「在」が使用される (水野(1987))。また、介詞「在」を伴わずとも、場所を表す名詞を動詞の前に置くことによって空間関係を示すことが可能である (大河内(1982))。英語でも中国語と同様前置詞で表されるが、空間表現を表す in, on, at など複数の前置詞が用いられ、基本的に省略は不可能であるという点で中国語と異なっている (田中・松本(1997))。例をあげると、次の(1)、(2)は本研究

の調査で使用した問題文の一部であるが、これら存在や着点を表す文を各国語に訳した場合⁵、韓国語では日本語の「に」と近い機能を持つ [e] (에) が使用されるが、中国語ではほとんどの場合「在」を⁶使い、英語ではonやinを用いる。

(1) 田中さんの大学は大阪にあります。

韓: 타나카씨의 대학교는 오오사카에 있습니다.

中: 田中の大学在大阪.

英: Mr. Tanaka's college is in Osaka.

(2) この紙を机に貼ってください。

韓: 이 종이를 책상에 붙여 주십시오.

中: 请把这张纸贴在桌子上.

英: Please stick this paper on the desk.

一方、次の(3)、(4)のように日本語で通常「で」を用いる文の場合、韓国語では「で」の機能に近い「에서(eso)」を用いる。しかし、中国語では「に」の文と同様いずれも「在」を用い、英語ではその状況によりatやinを使い分けるという違いがある。

(3) 子供たちが公園で遊んでいます。

韓: 어린이들이 공원에서 놀고 있습니다.

中: 孩子们在公园里玩.

英: Children are playing in the park.

(4) 日曜日はうちで勉強しました。

韓: 일요일에는 집에서 공부를 했습니다.

中: 星期天在家学习了.

英: On Sunday I studied at home.

学習者のL1の以上のような特徴を踏まえた上で、本研究では下記の2点を主なリサーチ・クエスチョンとする。

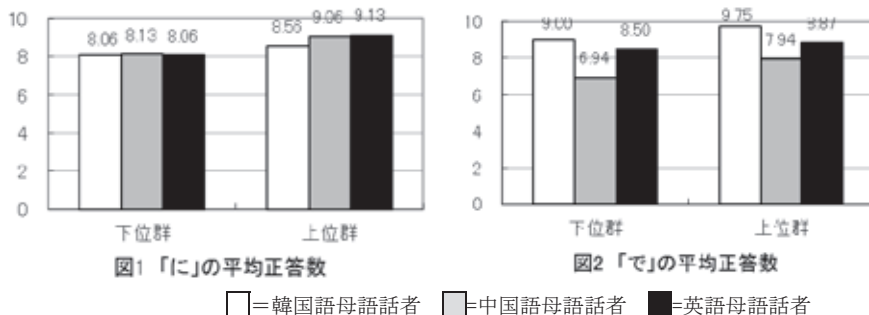
1) L1に日本語の「に」と「で」にほぼ対応する後置詞が存在する韓国語母語話者、L1の空間前置詞が「在」一種類で省略も可能な中国語母語話者、L1で空間前置詞の省略が不可能で、複数の前置詞を使い分ける英語母語話者の三者間で、「に」と「で」の選択傾向に違いがみられるのか。

2) 学習者の「に」と「で」の使用傾向は、日本語能力が上がるとともに、日本語母語話者に近づくのか。

4. 結果

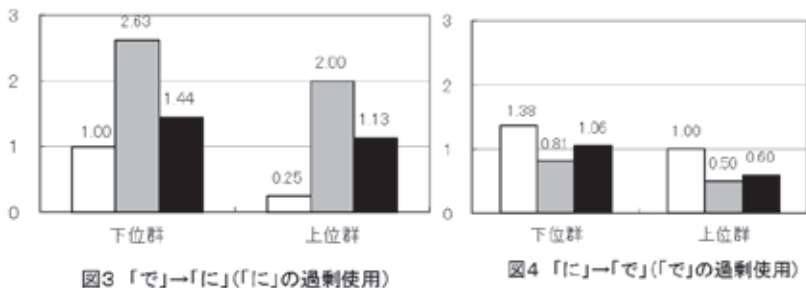
4.1. 正答数と誤使用数

まず助詞の正答数を見る。図1は各グループにおける「に」の問題の平均正答数、図2は「で」の問題の平均正答数を示している。



この平均値を被験者の日本語レベルと母語の2要因の分散分析にかけたところ、「に」、「で」の両問題ともにレベル間に有意差があった[「に」: $F(1, 91)=15.128$, $p<.001$, 「で」: $F(1, 91)=6.555$, $p<.05$]。このことから、「に」、「で」ともに学習者の日本語能力が上がるとともに助詞の使い分けも正確になるということがわかる。また、「に」の問題には母語間に有意な差がなかったが、「で」の問題には有意な主効果があった [$F(2, 91)=16.806$, $p<.001$]。Scheffeの多重比較を行ったところ、中国語話者の平均正答数が英語、韓国語話者より有意に低いという結果となった。つまり、中国語話者は英語、韓国語話者に比べ「で」の習得が遅れている可能性があるということである。

次に特定の助詞の過剰使用の傾向があるかどうかを調べるために、助詞の誤使用数、つまり助詞を誤って使用した数を見る。



□=韓国語母語話者 □=中国語母語話者 ■=英語母語話者

図3は「で」が正答の問題において「に」が選択された数、図4は「に」が正答の問題において「で」が選択された数の平均を示している。「に」と「で」の誤使用数をそれぞれ2要因の分散分析にかけた結果、いずれもレベル間に有意な差があった〔に： $F(1, 91)=4.605, p<.05$, で： $F(1, 91)=4.935, p<.05$ 〕。これは特に日本語能力の低いグループに助詞間の混同が多いということを示している。また、「に」と「で」の誤使用数にはいずれも有意な主効果がみられた〔に： $F(2, 91)=13.947, p<.001$, で： $F(2, 91)=3.309, p<.05$ 〕。多重比較の結果、「に」の誤使用数は中国語話者に有意に多く、英語話者と韓国語話者の間には有意差がなかった。また「で」の誤使用数は韓国語話者と中国語話者間のみ有意な差があった。つまり、中国語話者、特に下位群の被験者には「に」の過剰使用の傾向が著しく、中国語話者における「に」の正答数の高さは「に」の過剰使用の結果である可能性が高いということである。先行研究では「に」の過剰使用は英語話者にも観察されているが、今回の調査結果では、英語話者の「に」の過剰使用は中国語話者との比較ではそれほど目立たない。また韓国語話者には逆に「で」の誤使用が多いことから、蓮池(2004)の調査と同様、格助詞選択テストにおいては韓国語話者に「に」の過剰使用がみられないという結果となった。蓮池(2007)の絵を描写するタスクでは韓国語話者に「に」の過剰使用が観察されているが、それに関する分析は4.3.の問題別分析で行う。

4.2. TLU分析

4.1. では「に」と「で」の正答数と誤使用数についてそれぞれ個別に統計処理を行い、レベル別、母語別の分析を行ったが、ここでは正用数だけでなく過剰使用も計算に入れた上で被験者の目標言語の使用の正確さを測定することができるTLU(Target-like use)分析を用いて、被験者の格助詞「に」と「で」の

使用の正確さを測ることにする。TLUの点数 (%) は以下の公式(Pica(1983))
 によって算出する (満点は100%)。

$$\frac{\text{義務的文脈での正用数}}{\text{義務的文脈数} + \text{非義務的文脈での使用数}} \times 100$$

本稿では、「に」と「で」それぞれのTLUを計算する上で、各格助詞の正答となる問題10問を「義務的文脈」、正答以外（「に」が正答の場合は「で」が正答の問題10問）を「非義務的文脈」と考え、被験者一人一人の解答におけるTLUを計算した。表2は、被験者の「に」と「で」のTLUの平均値と、「に」、「で」間の比較をした *t* 検定の結果をグループ別に示したものである。

表2 「に」と「で」のTLU (%)

	にTLU	でTLU	<i>t</i> 検定
HK	83.64	88.87	*
HC	76.02	76.09	<i>n. s.</i>
HE	83.00	83.54	<i>n. s.</i>
LK	74.75	79.81	*
LC	65.18	64.24	<i>n. s.</i>
LE	71.03	77.26	**

n. s. : 非有意、 * : $p < .05$ 、 ** : $p < .01$

この結果から、次の2つのことがわかる。まず、中国語話者はHC、LCともに「に」と「で」のTLUに差がないことから、「に」と「で」の習得レベルがほぼ同等であるといえる。この結果は、先に述べた中国語話者における「に」の正答数の高さが「に」の過剰使用の結果であるということをも裏付けるものである。次に、韓国語話者ではHK、LKの両グループとも「で」のTLUが有意に高いことから、韓国語話者は「に」より「で」の習得が進んでいると考えることができる。中国語話者は「に」と「で」のTLUに差がないこと、また英語話者はLEで「で」のTLUが高いものの、HEでは「に」、「で」に差がないことから、韓国語話者における「で」 > 「に」の傾向は、母語である韓国語の影響によるものである可能性が高いといえる。

また、このTLU値を被験者の日本語レベル間及び母語間で比較するために、「に」と「で」のTLUをそれぞれレベルと母語の二要因の分散分析にかけた。そ

の結果、「に」、「で」ともにレベル間に差があり〔に： $F(1, 91)=19.535$ 、 $p<.001$ ，で： $F(1, 91)=11.322$ ， $p<.01$]、4.1. で分析した正答数の結果と同様、下位群より上位（H）群の習得が進んでいるということがわかった。また、「に」、「で」ともに母語間にも有意な主効果があり〔に： $F(2, 91)=4.625$ 、 $p<.05$ ，で： $F(2, 91)=9.764$ 、 $p<.001$]、Scheffe の多重比較の結果、「に」は韓国語話者のTLUが中国語話者より有意に高く、「で」は英語話者と韓国語話者のTLUが中国語話者より有意に高いという結果となった。この結果を4.1. で出した正答数からの分析結果と比較したものが表3である。

表3 母語間の比較（正答数とTLU）

	に	で
正答数	C=E=K	(K=E)>C
	K>C	
TLU	K=E	(K=E)>C
	E=C	

K:韓国語話者 C:中国語話者 E:英語話者

「で」の分析結果は、正答数、TLUともに中国語話者が韓国語、英語話者より低いという点で共通している。しかし、「に」については、正答数からの比較結果では母語間の差がなく、計算式に過剰使用も含んだTLUでは、韓国語話者と中国語話者の間に差が見られるという違いがある。従って、「に」の過剰使用を考慮に入れた場合、中国語話者の「に」と「で」の習得レベルはほぼ同等であると同時に、他の母語グループとの比較でも、「に」は韓国語話者より低く、「で」は韓国語話者と英語話者より低い位置にあることがTLU分析により明らかになった。

4.3. 問題別分析

次に、問題別の解答の傾向を分析する。表4は「に」と「で」の問題計20問の正答率を示したものである。上から10問が「に」が正答の問題、下の10問が「で」が正答の問題で、各問題の正答率は被験者のグループ別に示してある（正答率が70%に満たないものを、グレーの網掛けで示してある）。

表4 各問題の正答率 (%)

助詞	問題文	LE	HE	LC	HC	LK	HK
に-1	田中さんの大学は大阪(に)にあります。	94.4	100	87.5	93.8	100	100
に-2	鈴木さんと田中さんは教室(に)います。	100	100	100	100	93.8	93.8
に-3	わたしの友達は東京(に)住んでいます。	94.4	93.3	87.5	93.8	87.5	87.5
に-4	わたしの父は銀行(に)勤めています。	44.4	53.3	62.5	81.3	18.8	18.8
に-5	鈴木さんは、いす(に)座っています。	77.8	93.3	81.3	100	93.8	100
に-6	今朝、9時ごろ学校(に)着きました。	94.4	100	93.8	87.5	93.8	93.8
に-7	毎朝学校へ行くとき、バス(に)乗ります。	88.9	80.0	62.5	75.0	87.5	75.0
に-8	この紙を机(に)貼ってください。	88.9	100	81.3	100	81.3	100
に-9	加藤さんは、今、部屋(に)入りました。	83.3	93.3	87.5	100	93.8	100
に-10	みなさん、早く1階(に)降りてください。	38.9	100	68.8	75.0	56.3	87.5
で-1	あした山田さんのうち(で)パーティーがあります。	55.6	66.7	43.8	31.3	81.3	87.5
で-2	子供たちが公園(で)遊んでいます。	83.3	93.3	68.8	81.3	100	100
で-3	わたしの弟はデパート(で)働いています。	88.9	86.7	75.0	93.8	87.5	100
で-4	加藤さんは今、部屋(で)休んでいます。	50.0	86.7	31.3	56.3	81.3	100
で-5	山田さんが図書館(で)本を読んでいます。	94.4	100	81.3	87.5	93.8	100
で-6	土曜日、妹と映画館(で)映画を見ました。	94.4	80.0	56.3	75.0	75.0	87.5
で-7	日曜日(で)勉強しました。	100	100	75.0	93.8	93.8	100
で-8	きのう、姉とレストラン(で)食事しました。	94.4	86.7	87.5	87.5	100	100
で-9	今日、学校(で)山田先生にたくさん質問しました。	100	100	75.0	93.8	93.8	100
で-10	きのう、駅(で)田中さんに会いました。	88.9	86.7	100	93.8	93.8	100

まず、韓国語話者の解答に見られる傾向を分析する。格助詞選択テストの計20問の問題文を韓国語に訳した場合、「で」が正答の問題に関しては10問すべてが韓国語の「에서 (eso)」で置き換えが可能である。LK、HKの両グループとも「で」が正答の問題についてはすべて75%以上の比較的高い正答率を得ており、中国語、英語話者で正答率の低いくで-1>、<で-4>に関してもEK、HKともに80%以上の正答率を得ている。このことから、日本語と韓国語の格助詞の類似点がプラスに働き、韓国語話者は初中級の段階から他の母語グループとは違い、「ある」などの特定の動詞の存在に影響されることが少なく、比較的正確な助詞選択ができるということがわかる。

一方、「に」が正答の問題ではそのほとんどが日本語の「に」と類似した機能をもつ「에 (e)」に置き換えられるが、以下の3問に関しては「에」以外の助詞が用いられるのが一般的である(< >内の番号は表4における問題の番号と同一である)。

- (5) <に-3>わたしの友達は東京に住んでいます。
내 친구는 동경에서 살고 있습니다.
- (6) <に-4>わたしの父は銀行に勤めています。
우리 아버지는 은행에서 일하시고 있습니다.
- (7) <に-7>毎朝学校へ行くとき、バスに乗ります。
매일 아침 학교에 갈 때, 버스를 탑니다.

<に-3>、<に-4>には通常、韓国語の「에서 (eso)」が、<に-7>には対格を表す「를 (ru1)」が用いられる。従って上の3問に関しては母語からの負の転移が現れる可能性があると考えられる。<に-3>の正答率はLK、HKともに87.5%と比較的高い正答率を得ているが、<に-4>に関しては両グループとも18.8%と極端に低い数字となっている。LK、HKともに「で」を誤って選択した被験者が多く、韓国語の「에서 (eso)」を「で」に置き換えたための誤りである可能性が高い。<に-4>の「勤める」に比べ<に-3>の「住む」に「で」の誤選択が少なかった理由としては、「住む」は初級の早い段階で学ぶ語彙であるのに加え、日常生活において「に-住む」は頻繁に見聞きし、口にする機会が多いことから「勤める」に比べ習得しやすいということが考えられる。さらにもう一つの例外である<に-7>の「乗る」を見ると、LKの正答率は比較的高いものの、HKの正答率が70%台と比較的低くなっている。誤選択のすべてが「を」であることから、対格を表す「를 (ru1)」の影響による誤りであると考えられ、上級レベルになっても母語の影響による誤りが残る可能性を示している。その他にも、LKでは<に-10>の正答率の低さが目立つが、これも母語からの影響による可能性がある。中国語話者、英語話者では「を」を選択する誤りが多いのに対し、LKでは「を」だけでなく「で」の誤選択も目立った。これは韓国語の「에서 (eso)」には起点を表す用法もあるため、<に-10>の問題の意味を「～に降りる」ではなく「～から降りる」と解釈した被験者が「에서 (eso)」からの類推で「で」を入れたのではないかの推測も可能である。

TLU分析で韓国語話者に「で」>「に」の傾向が見られたが、これは本研究の使用したテストにおいて「で」の全てが「에서 (eso)」に対応し、正の転移が起りやすかったのに対し、「に」には「에 (e)」に対応しないものがいくつか含まれていたため負の転移が起こった結果であると考えられる。

しかし、本研究と同じ被験者を対象に実施した蓮池(2007)の絵を描写するタスクでは、韓国語話者は3つの母語グループ中最も「に」の多用傾向が顕著であるという、今回とは全く逆の結果が示されている。蓮池(2007)における韓国語話者の「に」の多用は、韓国語の「에 (e)」が進行形(-고 있다)の文において動作動詞との共起が可能な場合があることから日本語の「に」にも同様の規則

が適用可能であると類推した結果であると分析されている。韓国語話者が今回のテストにおいても同様の類推をしたとすれば、進行形（～ている）の含まれる問題文では「で」の代わりに「に」を選択する誤用が現われるはずである。しかし、「で」が正答である問題文のうち、進行形を伴うもの（<で-2>、<で-3>、<で-4>、<で-5>）の正答率は、HKでは全て100%、LKでも80%以上の高い正答率となっている。同じ被験者の運用にこのような違いが現われる原因の一つとして、タスクの種類が学習者の助詞選択に影響を与えた可能性が考えられる。蓮池(2007)のタスクでは被験者は比較的自由的な形式で文を産出することができたため、形式の正確さについては特別な注意を払わなかったものと想像される。それに対して、今回の調査は空欄を補充する形式であるため、被験者は必然的に助詞の使い分けに注意を向けることになる。つまり、今回の調査の方が目標言語的な形式が現れやすい状況下にあったのではないかと考えられる。Odlin(1989)は、負の転移は標準的な言語を維持することを求められるような焦点化された(focused)状況においては焦点化されない(unfocused)状況においてよりも起こりにくいということを示している。従って、蓮池(2007)で観察された韓国語話者による「に」の多用傾向は、母語の影響がより現れやすい条件のもとで現れたものであったと考えられる。

次に、中国語話者の正答率を見ると、正答率の低いものの多くが「で」が正答の問題であることがわかる。「に」の問題では<に-4>、<に-7>、<に-10>の正答率が比較的低くなっているが、これらの問題は英語、韓国語話者でも比較的正確率の低い問題であり、日本語学習者に共通して難易度の高い問題であると考えられる。<に-4>、<に-10>に関しては、英語話者、韓国語話者と比較するとむしろ中国語話者の正答率は高い方である。4.1.で各グループの正答数、誤用数から分析したように、中国語話者には「に」の過剰使用の傾向が強く、その結果他の母語グループにとって難易度の高い問題においても「に」の正答率が高くなっていると考えられる。

一方、「で」が正答の問題に関しては他の母語グループと比較しても中国語話者の正答率の低さが目立つ。<で-1>の正答率の低さは英語話者と共通しており、文中の動詞「ある」を存在の意味と混同し、「に」と結びつけたための誤りであると考えられる。その他の問題については、特に<で-2>、<で-4>、<で-6>で中国語話者、特に初中級レベルの正答率が低く、逆に中国語話者の正答率が高いものに<で-5>、<で-8>、<で-10>がある。これら正答率の高い問題文を見ると「本を読む」、「食事する(=ご飯を食べる)」、「田中さんに会う」など文中に現れる動詞は動作の対象が比較的わかりやすいものであるという特徴がある。一方で正答率の低い問題の文には「遊ぶ」、「働く」、「休む」

など動作の対象をもたない自動詞が多い。このことから中国語話者、特に初中级レベルの学習者は助詞「に」、「で」の選択の際に、隣接する動詞が対象物をもつかどうか、あるいは対象を示す「を」や「に」が文中に存在するかどうかを手がかりにしている可能性があると考えられる。自動詞が含まれる問題文の中でも<で-4>は最も正答率が低くなっているが、これは文中の「休む」という動詞が「遊ぶ」、「働く」などに比べ動作性が低く、「動作」というより「状態」を表すととらえた結果であると推測できる。この問題はHC、LEでも正答率がかなり低くなっており、動作性の動詞には「で」、状態性の動詞には「に」を使用すると考えている多くの学習者にとって難易度の高い問題であることがわかる。

また、同じ中国語話者でもLCとHCの正答数を比較するとほとんどの問題でHCの正答率がLCを上回っており、日本語能力の高いグループでは助詞の使用もより正確であるということがいえる。しかしHCにおいても<で-1>や<で-4>など難易度の高い問題においては正答率が極めて低く、初中级の段階で身につけた誤った助詞選択法が改善されずそのまま用いられているケースが少なくないことがわかる。

最後に、英語話者の解答を分析する。先行研究では英語話者が日本語の助詞を英語の前置詞に訳している可能性が指摘されているが、本研究の調査でも同様の傾向がみられるであろうか。3.4. で述べたように、存在や着点を示す「に」を英語に翻訳すると、前置詞inやonに置き換えられることが多く、「で」はatやinに置き換えることが可能な場合が多い。しかし英語の前置詞と日本語の助詞とは対応するわけではないため、当然ながら英語に訳した場合「に」の文にatが、「で」の文にinが用いられることも少なくない。「に」の問題計10問の問題文を英語に訳した場合、ほとんどの文にin、on、toが用いられるが、<に-4>に関してはatやforを使うのが一般的である。

(8) <に-4>わたしの父は銀行に勤めています。

My father works at/for a bank.

この問題の正答率を見るとLE、HEともに正答率が中国語話者よりも20%ほど低く、「に」の問題10問中最も低い数字を示している。従って母語の影響により「で」を選択した可能性も否定できないが、韓国語話者の点数がさらに低くなっていることや、中国語話者に「に」の過剰使用による正答が多いことを考え合わせると、特に英語話者にとって難易度の高い問題であったとは考えられない。一方、「で」が正答の問題についてはその場所をどのように捉えるかによってatでもinでもどちらも使用可能な場合がほとんどである。しかし<で-7>は「うち」をhomeに置き換えた場合at以外のものは入らない。また<で-1>はinも可能であるが一般的にはatを用いる。

- (9) <で-7>日曜日はうちで勉強しました。

I studied at home.

- (10) <で-1>あした、山田さんのうちでパーティーがあります。

Tomorrow there is a party at Mr. Yamada's house.

この2問の正答率を見ると、<で-7>はLE、HEともに100%の正答率であるが<で-1>に関してはLE、HEともに50、60%台の比較的低い正答率となっている。<で-1>の正答率の低さは中国語話者と同様、動詞「ある」に影響され、存在の「ある」と同様「に」を選択したためと考えられる。もし英語話者がatを「で」に置き換えていれば<で-1>に正の転移が生じるはずだが、この問題に関しては母語との類似性は選択のヒントになっていないことがわかる。逆にatに置き換えにくいのが以下の2問である。

- (11) <で-2>子供たちが公園で遊んでいます。

Children are playing in the park.

- (12) <で-4>加藤さんは今、部屋で休んでいます。

Mr. Yamada is resting in the room right now.

これらの正答率を見ると<で-2>はやや低いもののLE、HEともに80%台を得ており、<で-4>は特にLEで50%と「で」の問題中最も低い数値となっている。しかしこの問題に関しても先の<で-1>と同様中国語話者も低い正答率を示しており、動詞「休む」を動作よりも状態として捉えたための誤答が多いと考えられる。従って英語話者に特有の誤りとは言えず、英語からの転移であると断定することはできない。

これらの結果からは、英語話者の助詞選択は韓国語話者よりも中国語話者と類似した傾向を示していることがわかる。しかしながら英語話者と中国語話者の解答の傾向には異なる点もある。英語話者は中国語話者よりも助詞を選択する際に特定の助詞と動詞との組み合わせに影響されやすいという傾向がある。<に-10>の正答率を見るとLEの正答率が30%台と極端に低くなっているが、これは「を」の誤選択がほとんどであり、「を+降りる」(階段を降りる、電車を降りるなど)のユニット形成の結果である可能性が高い。また<に-7>では中国語話者の正答率が低いのに対し英語話者は比較的高い正答率を得ているが、これは「に+乗る」のユニット形成が定着しているためだと考えられる。この傾向は特にLEに顕著であり、日本語能力の高いHEの正答率からは「助詞+動詞」のユニット形成の影響はそれほど見られない。また、中国語話者には文中の動詞の対象物が明示されているかどうか助詞の選択のヒントになる傾向があったのに対し、英語話者にはそのような傾向が見られないということも、両者の助詞選択の傾向が異なることを示している。英語話者と中国語話者の間にこの

ような違いが生じる原因として考えられるのは、両者の母語における空間表現の違いである。英語には複数の前置詞が存在し、また、基本的に前置詞の省略は許されないという点で中国語と異なっている。従って、L1において単一の前置詞を使用し、それを省略することも可能な中国語話者に比べ、英語話者は、日本語の「に」と「で」のような格助詞の存在そのものにより敏感であり、格助詞の使い分けにもより注意を向ける傾向があるのではないかと推測できる。

5. まとめ

以上の結果をまとめると次のようになる。

1) 韓国語話者は「に」の過剰使用や「に+ある」など形式重視による誤選択が少ない点で中国語話者や英語話者と明らかに異なっており、正の転移により習得が進んでいることが明らかとなった。しかし、日本語と韓国語の助詞の用法がずれている場合には他の母語グループよりも低い正答率を示していることから、蓮池(2004)と同様、日本語との類似点が多い韓国語話者には負の転移もまた現れやすいことがわかった。また、蓮池(2007)で見られた「に」の過剰使用が今回は見られなかったことから、タスクのタイプの違いがL1転移の現れ方に影響を及ぼす可能性が示唆された。

2) 中国語話者には「に」の過剰使用の傾向が著しく、その結果「で」よりも「に」の問題で高い正答率を得ていることがわかった。これは蓮池(2004)と共通する結果であるが、今回の調査では助詞の直前の名詞を「位置」以外の助詞に限定したため、中国語話者は位置の名詞の存在の有無にかかわらず、「に」を過剰使用する傾向があるということが新たに明らかとなった。また、特に日本語能力の低いグループでは問題文において動詞の対象が明示されている場合には、対象を持たない自動詞に比べ「で」を選択しやすい傾向があった。

3) 英語話者は、中国語話者よりも「で」の正答数が有意に高く、「に」の誤使用数が有意に低いという点で、むしろ韓国語話者と共通する傾向が見られた。また、下位群に動詞の動作性、状態性の区別や助詞と動詞のユニット形成による助詞選択法が定着していること、上位群ではこうしたユニット形成による誤りが非常に少なくなっていることなど、中国語話者よりも助詞の使い分け法の習得が進んでいることをうかがわせる結果となった。先行研究で示唆されているL1からの直接的な転移の証拠は得られなかったが、英語の空間指示において前置詞の省略が不可能であることや、複数の空間前置詞を使い分けるといったL1背景が、L2の空間表現使用に間接的に影響している可能性が新たに示された。

4) 日本語レベル別に見ると、「に」と「で」の問題全体の正答数はいずれの母語話者でも日本語能力の高いグループの方が高かった。しかし問題別に見ると、一部上位群と下位群の正答数が逆転しているものもあり、特に韓国語話者の場合は母語からの負の転移と思われる誤答において、上位群の正答率が下位群を下回る傾向があり、学習過程における化石化あるいは逆戻り現象の表れである可能性が示された。

注

- 1 中国本土出身者のみ。
- 2 国籍は米国27名、イギリス3名、オーストラリア3名。
- 3 Simple Performance-Oriented Test (詳しくは小林他(1996)を参照)。今回の調査ではA版を使用し、65点満点中30点～47点を下位群、48点～64点を上位群に分類した。
- 4 日本の大学(大学院)に在籍する18～27歳の男女。
- 5 ここでの訳は筆者が各言語の複数の母語話者に調査を行い最も一般的と判断したものである。
- 6 ただし、着点の用法の中には「～に着く/乗る/入る/降りる」など、通常「在」が用いられないものもある。また、「在」には方位詞「里」や「上」を伴う場合がある。

参考文献

- 岩崎典子(2001) 「英語母語話者は「で」と「に」をどのように捉えているのか～インタビュー調査から見えてきたこと～」『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』61-66.
- 大河内康憲(1982) 「格助詞に対応するもの」『講座日本語学10外国語との対照 I』くろしお出版, 159-176.
- 金仁炫(2004) 『韓・日本語の対照研究と日本語教育』語文学社
- 久保田美子(1994) 「第2言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号, 72-85.
- 小林典子・フォード丹羽順子・山元啓史(1996) 「日本語能力の新しい測定法(SPOT)」『世界の日本語教育』6号, 201-218.

- 迫田久美子 (2001) 「学習者の文法処理方法」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』第2章, 大修館書店, 25-43.
- 田中茂範・松本曜 (1997) 『日英語比較選書—6 空間と移動の表現』研究社
- 朴在權 (1997) 『現代日本語・韓国語の格助詞の比較研究』勉誠社
- 蓮池いずみ (2004) 「場所を示す格助詞「に」の過剰使用に関する一考察—中級レベルの中国語母語話者の助詞選択ストラテジー分析—」『日本語教育』122号, 52-61.
- 蓮池いずみ (2007) 「日本語の空間表現使用に見られる母語の影響について—韓国語, 中国語, 英語母語話者を対象に—」『第二言語としての日本語の習得研究』第10号, 68-86.
- 蓮池いずみ (2008) 『日本語学習者の空間表現使用における簡略化と言語転移—格助詞「に」と「で」の使用を中心に—』名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻博士学位論文.
- 水野義道 (1987) 「場所を示す中国語の介詞<在>と日本語の格助詞「に」「で」」『日本語教育』62号, 105-117.
- Jarvis, S., & Odlin, T. (2000) Morphological type, spatial reference, and language transfer. *Studies in Second Language Acquisition*, 22, 535-556.
- Odlin, T. (1989) *Language Transfer*. Cambridge University Press.
- Odlin, T. (2003) Cross-Linguistic Influence. Doughty, C and M. Long (eds.) *The Handbook of Second Language Acquisition*. Oxford: Blackwell.
- Pica, T. (1983) Methods of morpheme quantification: Their effect on the interpretation of second language data. *Studies in Second Language Acquisition*, 6, No. 1, 69-78.

